
仮面ライダー カブト

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー カブト

【NZコード】

N8059D

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

女主人公の板橋聰美がカブトに変身して・・・。これはカブトのIFSです。

都内某所にある廃墟と化したビル。

その一階に、ワームが一体潜んでいる。

そこへ二人組の男女がやつてくる。

男は一寸格好良い一枚目の顔。

女は黒髪を背中まで伸ばし、田つきがつり田^だとも可愛い。

年齢は一人とも16歳。高校一年生である。

その一人の前にワームが現れた。

ワームは女を素手で撲殺すると、女に擬態した。

男は「うわああああ！」と悲鳴を上げて逃げ出そうとしたが、女に腕を掴まれてしまった。

「何処行くのよ？」

「放せ！」

男は女に擬態したワームの腕を振り払い、逃げ出した。

しかし、女に擬態したワームが擬態を解いて前に回り込んだ。

男は慌てて止まり、後退りをした。

ワームは再び女に擬態し、男に歩み寄る。

「来るな化け物！」

「化け物？何言つてんのよ。私は板橋^{いたばし}文香。それはあなたが良くな
知つてゐるじゃない」

「違う！お前は文香じゃない！」

男はそう言つと、足元に在つた死体に躡いて尻餅を着いた。

「俺は見たぞ！お前が文香を殺して、文香になつたのを！」

「そう。じゃあ死ね！」

文香はそう言つと擬態を解いて男に襲い掛かつた。

するとそこへ、「一ーン、コーン、と足音が聞こえてきた。

その足音は段々と大きくなりながら近付いてくる。

そして足音の主が姿を現した。

その主は文香に瓜一つの少女。

名は板橋いたばし聰美。文香の双子の姉である。

ワームは文香に擬態して「誰！？」と振り向いた。

聰美は文香を睨むと、近付いて蹴り付けた。

「きやつ！」

文香は蹠跟めき尻餅を着いた。

「何すんのよ！？」

文香は聰美を睨み返した。

そんな彼女を尻目に聰美は男に顔を向けた。

「相楽、あんたは逃げて」

「お前はどうすんだよ！？」いつ、文香を殺して化けたんだぞ！もしかすると他にも同じ奴が居て、お前も文香みたいに殺られるかも知れねえんだぞ！？」

「大丈夫。私は殺られないわ」

聰美はそう言つとウイーンクをして文香に向き直る。

「文香の仇は取らせて貰うわ」

文香は「ふつ」と笑つてワームに姿を変えた。

「丸腰の人間がワームに敵うと思つてるの？」

と文香の幻体が出現して訊ねる。

「あら、あなたの目は節穴？」

聰美はそう言つて腰に装着したライダーベルトを示した。

「そいつをこっちに頂戴」

「断るわ」

「そう。それじゃあ力ずくで奪うしか無さそうね」

ワームは文香の幻体を仕舞つて立ち上がり、聰美に襲い掛かる。

聰美はひらりと身をかわして反撃した。

ワームは蹠跟めき倒れるが、直ぐに立ち上がりてまた襲い掛かつた。

するとカブトゼクターが飛来し、ワームを攻撃した。

「何なのよ此奴！？」

ワームは文香の幻体を出してそう言わせる。

「くつ、あつち行きなさいよ！」

ワームは攻撃してくるゼクターを必死に払う。

（来い）

聰美が念じると、ゼクターは聰美の下に飛んでいった。

聰美は飛来したゼクターを掴み「変身」とベルトにセットした。

「HENSHIN」

ゼクターから音声が発せられ、マスクドライダーシステムが起動し、聰美をカブトに変身させる。

バキュン！

カブトはカブトクナイガンを手にして光弾をワームに放った。それでもう一発、更にもう一発と歩きながら連射してワームを壁まで追い詰める。

ワームは熱を帯びて全身を赤くすると、脱皮して蜘蛛の能力を持つたアラクネアワーム フラバスになった。

フラバスはクロツクアップをし、田にも留まらぬ速度でカブトに体当たりをして逃げていった。

「ちつ」

カブトは舌打ちをすると、ベルトからゼクターを外して変身を解除した。

「何なんだよ今の一!?」

と男、相樂雅弘が聰美の前に駆けて訊ねる。

「それはどっちの事を訊いてるのかしら？」

「両方だ」

「そう。じゃあ先刻の怪物から話すわ。あれはワームと言つて、地球外からやって来た侵略者よ。人間を殺してその殺した人間に擬態して社会に溶け込む。そうやって人知れず、地球を支配していくの。私はそんな奴らから地球を守る為に戦つてる正義の味方よ」

「知らなかつた。そんなのが居たなんて。これじゃあ、安心して外歩けないじゃん」

「大丈夫。あんたの事は私が守るわ」

「本當かよ？」

と雅弘が細い目で見る。

「何よその顔？」

「文香の事守れなかつた癖によく言えるな」

「すみませんね。外に仲間が居て足止め食らつて助けられなくて」

聰美は雅弘を睨みながらそう言つた。

「て言うか、何でこんな所に来たのよ？」

「文香が言つたんだ。探検しようつて」

「あんたたち高校生にもなつて未だそんな事してたの？」

「俺は止めたんだ。て言つたが、お前こそ何で居るんだよ？まさか、

俺たちを付けてた、つて事は無いよな？」

「そ、そんな事する訳無いじゃない！」

「付けてたんだ？」

「五月蠅い！」

聰美はそう言つて走り去り、すると、文香の死体に躊躇つて転んだ。

「ごめん文香。痛くなかった？つて、死人が痛みなんか感じないか」

聰美は立ち上がり、文香の死体をお姫様抱っこした。

「文香、あんたの仇は必ず取るからね」

聰美はそう言つて、文香をビルの外へ運んだ。

するとそれを追つてきた雅弘が訊ねた。

「文香の事、お袋さんには何て言つんだ？」

「うちに親は居ないわ。一人とも、ワームに殺された」

「そうか」

「ねえ、相楽

「ん？」

「文香の事、家まで運んでくれる？私は文香を殺つたワーム捜すか

「自分で運べよ」

「バイクなの。死体なんか運べる訳ないでしょ？」

聰美はそう言つて傍らに停めてあるグレーのバイク、CBR1000RRの方を見た。

「お前、免許持つてたのか？」

「持つてるわよ。つーかお願ひね」

聰美はそう言つて半ば強引に文香の死体を雅弘に押し付け、バイクまで駆けていき、鍵を挿してエンジンを掛け、ヘルメットを被つて跨つて発車した。

その瞬間、クロツクアップしたフラバスが襲つてきてバイクが倒れ、聰美は投げ出された。

「うつ！」

地面上に叩き付けられ、呻き声を上げる聰美。

「聰美！」

雅弘が聰美の下に駆けようとすると、フラバスが目の前に立ちはだかり、左右の腕に着いたウェブシューターから蜘蛛の糸を出して死体を奪取し、消化粘液を出して死体を溶解して文香に擬態した。

「雅弘、私の仲間にならない？」

「誰がお前なんかの仲間になるもんか！」

雅弘はそう言つて逃げ出そうと踵を返した。

すると目の前に一体のワームが立つていた。

ワームは雅弘に近付き襲い掛かつた。が、カブトゼクターが飛来してワームに攻撃をする。

「お姉ちゃん、私の邪魔をするつて訳？」

文香は聰美の方を向くとそう訊ねた。

「当然よ。これ以上あんたたちの好きにはさせないわ。それと、気安くお姉ちゃんと呼ばないで頂戴」

聰美はそう言つとゼクターを引き寄せてベルトにセットした。

カブトに変身した聰美は立ち上がり、文香の懷に駆けて攻撃した。

「きやつ！」

文香は尻餅を着くと、擬態を解いて立ち上がり、クロツクアップ

でカブトに襲い掛かった。

「くつ！」

体当たりをされ蹠跟めくカブト。

そして追い討ちを掛ける様に再度体当たりをするフラバス。

「うわっ、助けてくれ聰美！」

雅弘がワームに捕まりSOSを出す。

カブトは咄嗟にクナイガンを構えてワームを狙うが、フラバスに吹っ飛ばされて宙を舞い、フラバスに地面へ叩き付けられた。

カブトは直ぐ様立ち上がり「キヤストオフ！」とゼクター ホーンを開展。

「Cast off」

とゼクターから音声が発せられ、マスクドアーマーが飛散し、迫るフラバスとワーム、雅弘を吹っ飛ばした。

「うわああああ！」

と宙に舞つた雅弘が悲鳴を上げると同時に、カブトのカブトホーンが起き上がる。

「Change beetle」

「クロックアップ」

カブトはサイドバッклルを叩いた。

「Clock up」

音声が鳴り、クロックアップが発動。

同時にワームと雅弘の落下速度がスローになつた。

カブトは三つのフルスロットルを順番に押し、ゼクター ホーンを展開した。

「ライダー、キック」

そう言つて元に戻すカブト。

するとチャージされたパワーが解き放たれる。

「Rider kick」

その音声と共に、カブトはフラバスに飛び蹴りを放ち、撃破した。そして足早に雅弘に近付いて抱き抱え、クナイガンをワームの胸

に突き刺して飛び退いた。

「Clock over」

と周囲の動きが元に戻ると同時にワームが爆裂霧散し、爆風でナイガンがカブトに飛来して手に収まった。

「え、何が起きたの？」

と辺りをキヨロキヨロ見回す雅弘。

「どうした？」

とカブトが訊ねる。

「あんた誰？」

姿が変わつてるカブトを見て雅弘がそう問う。

「あら、私が誰だか判らないの？」

「聰美？」

「そうよ」

「マジ!? 淫え格好良いんだけど!」

「あ、有り難う」

仮面の下で聰美は頬を赤らめた。

「て言うか俺、何で抱えられてんの?」

「そんなのどうでも良いじゃん」

カブトはそう言つと雅弘を下ろし、変身を解除した。

「ああ、そうだな。所で先刻のは?」

「倒したよ」

「いつ?」

「あんたが宙を舞つてる間に」

「どうやつて?」

「目にも留まらぬ速度で必殺技を放つてボカーン」

「マジ? 見たかったな」

「無理よ。人間の目で追う事なんか出来ないもん」

「ふーん。まあ良いや。助けてくれて有り難うな

「べ、別に礼なんか言われたつて嬉しくもなんともないんだからね」

聰美はそう言つて頬を赤らめソッポを向いた。

「素直じゃねえな。嬉しいならハツキリそう言えよ」

「五月蠅い！相楽のバカ！」

聰美はそう言つとバイクまで駆けて起こし跨つて去つていつた。

「何で怒つてんだ、あいつ？」

と雅弘は首を傾げた。

(後書き)

第2弾制作しました。下記のリンクから飛べます。携帯の場合には案内ページから

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8059d/>

仮面ライダーカブト

2010年10月8日15時55分発行